

江戸文芸を中心とした 茶の湯と文学

講師 石塚修 いしづかおさむ

氏「筑波大学教授」

茶の湯と文学の関わりは、これまであまり注目されていませんでした。しかし特に、江戸時代の文芸においては茶の湯の素養がないと読み込めない作品が、実は多く残されています。井原西鶴や近松門左衛門を中心に茶の湯と文学との深い関わりについて皆様と考えていきたいと思います。

西鶴の文芸と
茶の湯

納豆のはなし



【石塚修氏プロフィール】

1961年、栃木県生まれ。1986年、筑波大学大学院修了。博士「学術」。筑波大学人文社会系教授。2014年度、第25回茶道文化学术奨励賞受賞。主な著書に『西鶴の文芸と茶の湯』〔思文閣出版、2014年〕、『納豆のはなし—文豪も愛した納豆と日本人の暮らし』〔大修館書店、2016年〕、『茶の湯ブンガク講座—近松・芭蕉から漱石・谷崎まで—』〔淡交社、2016年〕など多数。



日時：平成29年10月7日【土】午後3時～4時30分

場所：安与ビル7階 安与ホール

【東京都新宿区新宿3-37-11】地図参照

会費：2,000円【一般】 1,800円【会員】

当日受付までご持参下さい。

定員：250名

申込方法：電話にて下記までお申し込み下さい。

TEL.03-3352-5120

【午前9時～午後5時 土日祝日除く】



■茶の湯同好会とは

茶の湯を愛好する人々の集まりです。昭和48年に流派を超えた茶の湯の研究団体として発足、現在会員は約1,500名です。茶の湯に関心のある方であればどなたでも随時入会できます。毎月茶の湯に関する講座を開催、会報『茶の湯』を発行。茶道夏期大学講座、茶会、茶室見学会、一般公開講演会も定期的に開催。入会金 2,000円、年会費 7,800円。

■茶の湯同好会事務局 TEL. 03-3352-5120 〒160-0022 東京都新宿区新宿3-37-11
E-mail. mail@cha-no-yu.jp URL. http://www.cha-no-yu.jp

茶の湯と文学——江戸文芸を中心に——

石塚修

井原西鶴 1642年(寛永19)～1693年(元禄6年)

*「とばの魔術師西鶴」→談林派俳諧師

寛文13年(1673)3月(鶴永) 32才

延宝5年(1677)5月

生玉神社南坊 「万句興行」。12日間百韻百巻

貞享元年(1684)6月 41才 住吉大社

一昼夜に23,500句

「西鶴の浮世草子」

・天和二年(1682)『好色一代男』

・貞享元年(1684) 江戸版『好色一代男』

『諸艶大題』

・貞享二年(1685)淨瑠璃『曆』

『西鶴諸国はなし』

『極久一世の物語』

淨瑠璃『風陣八角』

・貞享三年(1686)『好色五人女』

『好色一代女』

『本朝二十不孝』

『男色大鑑』

『懐鏡』

『武道伝来記』

・貞享五／元禄元年(1688)

『日本水代藏』『武家義理物語』『嵐無常物語』
『色里三所世帯』『好色盛衰記』『新可笑記』

・元禄二年(1689)『本朝桜陰比事』

・元禄五年(1692)『世間胸算用』

・元禄六年(1693)『浮世采花一代男』

八月十日没 52才 (浮き世の月見過)にけり末(一年)
『西鶴遺土産』

・元禄七年(1694)『西鶴鐵留』

・元禄八年(1695)『西鶴俗つれづれ』

・元禄九年(1696)『万の文反古』

・元禄十二年(1699)『西鶴名残の友』

『西鶴諸国ばなし』（貞享二・1685）卷五の一「挑灯に朝顔」

野は菊・萩咲きて、秋のけしきほど。しめやかにおもしろきことはなし（しつとりと趣深いものはない）。心ある人は歌こそ和風の風俗なれ（風雅の心のある人は和歌をたしなむのが日本のならいと言える）。何によらず花車の眞和歌の道こそ一興なれ。

奈良の都のひがし町に、しほらしく住みなして明け暮れ茶の湯に身をなじ身を入れて、興福寺の花の水をくませ（花の井の名水を汲ませている）、かくれもなき豪助なり（よく知られた豪居處であった）。

ある時この里のござかしき者ども（生意氣な者たちが）朝顔の茶の湯を望みしに、かねがね日を約束して（事前に日にちを約束し）、方に心を付けて朝の七つ（午前四時頃）上りこしらへ（準備して）、この客を持つに、おおかた時分こそあれ（何事にも適切な時間があるのに）、昼前に来ても案内を言ふ。

亭主立腹して、客を露地に入れてから、挑灯をともしてむかひに出るに、客はまだ合点ゆかず、夜の足元するこそ、をかしけれ（夜のようにぎこちなく歩く姿は奇妙である）。主おもしろからねば、花入れに土についた芋の葉を生けて見すれば、その通りなり（なんの反応もない）。とかく心得ぬには、心得あるべし（心得のない人への対応には心得がいるものである）。亭主も客も心ひとつ数寄人にあらずしては、楽しみも欠くるなり。

むかし巧者なる、茶の湯を出されしに、庭の掃除もなく積の秋のけしきをそのままにしておかれしに、客もはや心付けて、いかさま（どれほど）めずらしき道具出べきと思ふに、案のことく掛物に「八重葎茂れる宿」の古歌をかけられる。

またある人、漢の茶の湯（唐物の趣向の茶の湯）を望みしに、諸道具皆唐物を飾られしに掛物ばかり阿倍仲麻呂が詠みし「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも」の歌を掛けられたり。いつれも感服するに（どの客も感服して）（この歌は仲丸、唐土から古里を思うて、詠みし歌なり）と、しばらく亭主の作（趣向）のほどを詠めるとなり。

「客もかかる人こそ、この道をすかるる甲斐あれ」と、ある人の語りし。

キハ重葎 茂れる宿のさびしきに人こそ見えね 秋は来にけり 恵慶法師

松尾芭蕉「笠の小文」（貞享四・1687）

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化したがひて四時を友とす。見る處、花にあらずといふ事なし、おもふ所、月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷秋にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷秋を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。